

多様な主体による地域社会形成の フレキシビリティに関する実証的研究 (H25-26)

～飯能市吾野地区のまちなみ継承を事例として～

The Empirical Study on the Flexibility of Communities by Diversified Actors
—Case Study of the Preservation of Townscape in Agano district, Hanno City—

人間環境デザイン学科 菅原 麻衣子
SUGAWARA Maiko
健康スポーツ学科 井上 治代
INOUE Haruyo

要旨

本研究では、埼玉県飯能市吾野地区を対象とし、「その地区にしかないまちなみ」という目に見える地域の財産の継承状況を手がかりとして、まちなみの価値の共有や次世代への継承を誰がどのように担っていくことができるのか、この担い手の多様性という点に着目した地域社会形成のフレキシビリティについて実証的に明らかにすることを目的とする。研究方法は、[①家の継承性]、[②個人としての地域への関わり方]、[③組織としての取組み]のそれぞれの実態と課題を捉えるため、①家および②個人については、吾野地区の全世帯（868世帯）及び個人（1世帯につき最大2票）に対するアンケート調査を実施した。有効票数は家族票639票（73.6%）、個人票941票（54.2%）である。また③組織については各種団体や組織代表者等へのヒアリング調査を重ねた。

各種調査結果として、まちなみの価値は地元住民には見えにくく、地元から離れるほど価値が認識されやすい。また地域の衰退が深刻化した地域ほど、従来の自治会体制では衰退を克服できる状況にない。それに対し、目的組織としての地域づくり団体は、地域の将来を変えうる重要な存在であり、かつ地元住民だけにこだわらない体制の取り方が可能である。地域づくりの担い手自身も、ライフスタイルが多様化しており、市外県外から通う人や、市街地と山間地域の二拠点居住をしている者もあり、貴重な人材である。地域づくり活動への賛同者を地元内外から集めること、また現在のリーダーの役割を引き継ぐ人材育成が重要である。

まちなみ整備の観点では、地元住民自身による古民家改修は、地域に一つの大きなインパクトを与えた。また行政による景観モデル地区や景観重要建造物の指定は、住民による活動を後押しするものとしてうまく機能している点で評価できる。一方で、空家問題も生じており、さらなる拠点を増やしていける可能性を有している。

キーワード：中山間・山間地域 地域活性化 まちなみ 家の継承 個人・組織の地域活動

I. はじめに

(1) 研究の背景

研究対象とする埼玉県飯能市吾野地区は、大正期の古民家が街道沿いに軒を並べ、現在でもその歴史的な風情が感じられる「吾野宿」のまちなみをもつ。関東地方に存在する宿場町の中でも、まちなみが良好に保たれてきた宿場町の一つである。しかしながら近年、家の世代交代や住宅機能の現代化に伴い個人宅の改修・改築が進み、まちなみとしての統一感が揺らぎつつある。

一方で、このまちなみ景観に係る問題のみならず、吾野地区は山間地域に位置し、わが国の農山村地域に共通する超高齢化や集落の衰退といった根本的な課題を持つ。林野率は83.7%で江戸時代より西川林業の中心的地域であったが、林業や養蚕業の衰退を経て、バブル期には一時的な宅地開発が行われるものの、その後地域産業は低迷の一途である。地区は25の集落で構成され、人口推移は3,084人（H15）から2,406人（H24）と10年で21.9%減少し、一方で世帯数は1,098世帯（H15）から1,025世帯（H24）とその減少率は低く、世帯あたり人数の減少が読み取れる。小学校は吾野地区内に4校あったものの、統廃合により2校となった。平成27年度時点で西川小学校の児童数は33名、吾野小学校は45名、統廃合後も極小規模校である。



写真1 顔振峠から吾野地区をのぞむ



写真2 吾野宿のまちなみが残る通り

このように中山間・山間地域に共通する現代的課題を有しているが、その中でも吾野地区ならではの地域条件として、次のことに着目した。

吾野地区は山間地域でありながら西武秩父線（吾野駅）により都市部へのアクセスが比較的良いことが、他県の中山間・山間地域と大きく異なる点であり、強みといえる。西武池袋線により池袋から最短1時間15分の距離であり、居住者の中には、住まいは農的な環境におきながら都市部に勤務する人、都市部に居を構えて休暇の際は生家の農作業や地域の役を担う人、都市部に転出したが地元に残した家屋（空家）を管理するために定期的に帰ってくる人など、この立地ならではの住まい方や、故郷とのごく近い関係がみられる。またこの地区にはまちづくり組織として、吾野宿市を再生する会、吾野宿再生と吾野を語る会、吾野地区まちづくり推進委員会等が活動を展開している。さらには、地区周辺にハイキングコースが整備されていることにより、平日でも都市部からハイカーが訪れるといった定常的な来訪者の多さが見受けられる。

このように、当該地区は地域社会の持続性に関する課題に対し、それを解決しうる豊富な人材・組織資源を有している。すなわち、地域社会の担い手が「閉じられた固定的なメンバー」ではなく、「住まい方や故郷との関係が多様な主体」で構成されていることが窺える。この地域社会形成のフレキシビリティを探ることは今後の吾野地区、ひいては中山間・山間地域の将来計画において重要な示唆を与えるものと考えられる。

（２）研究目的

以上のことから本研究では、飯能市吾野地区を研究対象とし、「その地区にしかないまちなみ」という目に見える地域の財産の継承状況を手がかりとして、まちなみの価値の共有や次世代への継承を誰（個人・親世帯・子世帯・地域組織・住民有志の組織・地域外居住者等）がどのように担っていくことができるのか、この担い手の多様性という点に着目した地域社会形成のフレキシビリティについて実証的に明らかにすることを目的とする。

具体的には、まず〔①家の継承性〕という観点から現在の家族形態、各人の勤務地や別居する子の居住地、親・子世帯間の引き継ぎの状況を捉える。また〔②個人としての地域への関わり方〕の観点から、現在の地域活動や近所つきあいの状況、および地域外からの来訪者に対する評価や今後に期待することを捉える。さらに〔③組織としての取組み〕の観点から、自治会の組織体制や、地域づくり活動の主たる役割を担っている「吾野宿再生と吾野を語る会」の活動内容の特徴と課題を明らかにする。

（３）研究方法

研究方法は、〔①家の継承性〕、〔②個人としての地域への関わり方〕、〔③組織としての取組み〕のそれぞれの実態と課題を捉えるため、①家および②個人については、吾野地区の全世帯及び個人（１世帯につき最大２票）に対するアンケート調査を実施した。また③組織については現地において各種団体や組織代表者等へのヒ

アリング調査を重ねた。

なお、アンケートの分析にあたっては、吾野地区内の地域的特徴を考慮し、吾野地区をさらに〔吾野〕・〔北川〕・〔南川〕・〔西川〕の４つに区分し、４地区間の比較分析を行う（図１）。この４区分は、小学校区や住民の生活圏に対応し、行政サービス展開の単位でもある。〔吾野〕は吾野地区におけるかつての中心地で

調査対象地：埼玉県飯能市吾野地区

人口：2317人 世帯数：1017世帯（H25.10 飯能市人口統計より）

面積：3,460ha 林野率：83.7%

※飯能市参観地域振興計画の対象地域

歴史：江戸時代より伝統的な西川林業の中心的地域

交通：地区内を西武秩父線が通過し、吾野駅、

西吾野駅、正丸駅の３駅設置。

池袋駅から吾野駅まで最短で１時間強。

幹線道路として、県内は人間市から秩父をつなぐ

国道299号が通過。

地域：吾野地区は小学校区や生活圏に対応する４地区

〔西川〕・〔吾野〕・〔北川〕・〔南川〕に区分され、

25の自治会で構成。

歴史的環境：

〔西川〕には宿場町「吾野宿」のまちなみの名残りがみられる。

〔北川〕・〔南川〕地区にはそれぞれ歴史的な旧校舎が残る。

〔北川〕では「喜多川神社の獅子舞」が受け継がれている。

調査方法：吾野地区住民アンケート調査

期間：平成25年10月1日～10月20日

対象：自治会加入の全世帯（868世帯）

配布数：家族票—868票

個人票—1,736票（1世帯あたり2票）

有効数：家族票—639票（73.6%）

個人票—941票（54.2%）地区別内訳→

地区名	家族票	個人票
西川	216	334
吾野	129	213
北川	106	156
南川	188	238
全体	639	941



図１ 調査地およびアンケート調査の概要

あり、吾野小学校や行政センターが位置する。〔北川〕は現在でも獅子舞の文化が受け継がれているが、北川小学校は廃校となり吾野小学校に統合された。〔南川〕も南川小学校が廃校となり吾野小学校に統合された。〔西川〕は現在の中心地となっており、吾野宿のまちなみはここに位置する。また西川小学校と吾野中学校が位置する。

Ⅱ. 家の継承性

(1) 家と地域との関係

家族票の回答者の年代は、全体として60代以上が7割を占めるが、中でも〔北川〕は70代以上の割

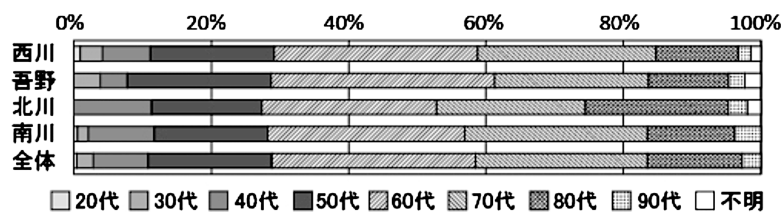


図2 回答者年代

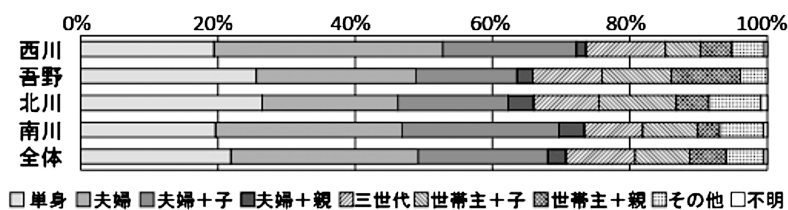


図3 家族構成

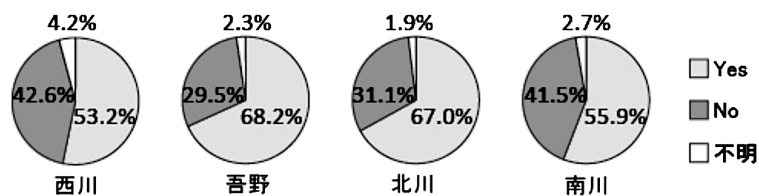


図4 現在居住する敷地は親世代から譲り受けたものか

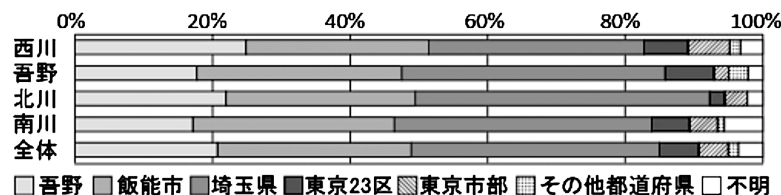


図5 家族構成員の勤務地

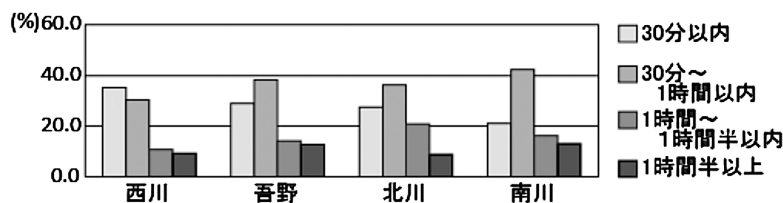


図6 家族構成員の通勤時間

合がやや多い（図2）。家族構成をみると、単身世帯と夫婦世帯で約5割を占め、回答者の年代と照らし合わせると、高齢世帯が全体の半数を占める（図3）。また〔吾野〕、〔北川〕では単身世帯の割合が他2地区よりやや多い。現在居住する敷地は、親世代から譲り受けた土地であるのは、全体として約6割であり、〔吾野〕、〔北川〕はその割合がやや多くなる（図4）。

次に、家族構成員の勤務地をみると、その多くは埼玉県内に位置し、特に〔北川〕はその傾向が強い（図5）。通勤手段は概ね車であり、通勤時間は1時間以内が多くを占める。このように中山間地域に住みながら、周辺市部や都市的地域にも通勤できる立地にあることが確認できる（図6）。

（2）別居の子どもと地域との関係

次に別居の子ども（以下、他出子）がいる世帯数の割合をみると、〔北川〕が他地区と比べてやや少ないが、どの地区も約半数が該当する（表1）。他出子の居住地域は、埼玉県内が約6割、東京都まで含めると約7割となる（図7）。

帰省頻度をみると、「よく帰る」から「月1・2回」までで約4割を占め、特に〔北川〕は「よく帰る」の割合が他地区より多い（図8）。帰省の機会は、一般的な「法事」「盆と正月」「お墓参り」に続いて、「家族の様子を見にくる」が約4割となる（図9）。このように、都市部の交通網の発達からも他出子は比較的行き来しやすい地域に住んでおり、実家への関わりが得やすいことがうかがえる。

吾野地区における地域組織・地域団体への他出子の参加状況をみると、全体として非常に少ないが、〔北川〕では自治会16.3%、獅子舞の会8.2%と、実家を離れながらも参加している様子がみられる（図10）。

表1 別居の子がいる世帯の実数と割合

地区	実数	%	母数	別居の子がいる世帯のうち、別居の子の続柄（%表示）										
				長男	次男	三男	四男	五男	長女	次女	三女	四女	母数	
西川	107	49.5	216	63.6	26.2	4.7	0.0	0.0	51.4	21.5	2.8	0.9	107	
吾野	66	51.1	129	69.7	21.2	6.1	3.0	1.5	47.0	10.6	3.0	0.0	66	
北川	49	46.2	106	71.4	26.5	2.0	0.0	0.0	49.0	32.7	4.1	0.0	49	
南川	101	53.7	188	66.3	27.7	5.9	1.0	0.0	42.6	17.8	8.9	1.0	101	
全体	323	50.6	639	66.9	25.7	5.0	0.9	0.3	47.4	19.8	5.0	0.6	323	

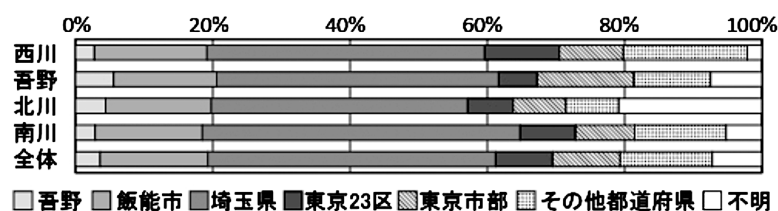


図7 他出子の居住地

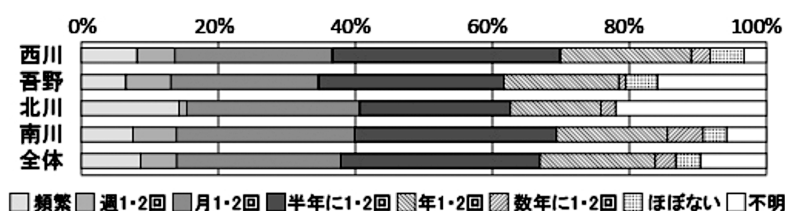


図8 他出子の帰省頻度

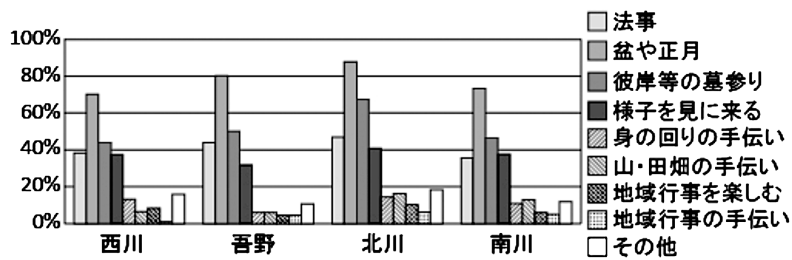


図9 他出子の帰省機会

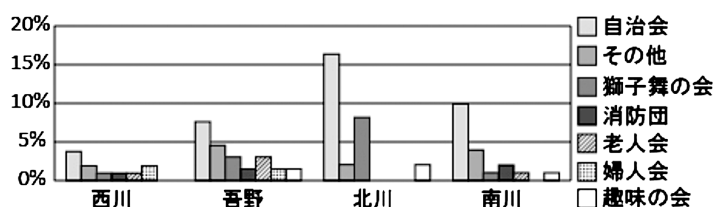


図10 他出子の吾野地区における参加組織・団体

(3) 家の後継者の可能性

現在の住まいや土地の将来については、「不動産業者に売却したい」や「どうすればよいか不安」が多く、特に〔北川〕ではその不安が非常に大きいことが分かる(図11)。また〔南川〕では信頼できる人に「譲る」・「貸す」の割合が他地区よりやや多くみられる。

現在の家を受け継ぐ人が決まっている世帯は、どの地区も3割程度で、誰かに受け継いでほしいも含めると7～8割となる(図12)。受け継いでほしい家族はどの地区も同居・別居に関わらず長男が挙げられている(表2)。また受け継いでほしいと考える他出子について、実際に地元に戻るか否か

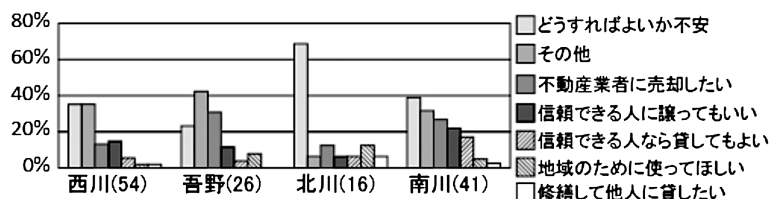


図11 住まいや土地の将来に対する考え ※ () 内は回答者数

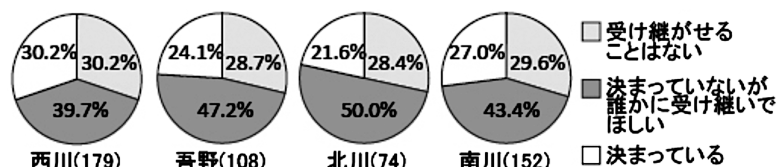


図12 後継ぎの決定状況 ※ () 内は回答者数

表2 将来家を継ぐ、または継いで欲しい人(配偶者を除く)

%	同居している				別居している							回答者数
	長男	長女	次男	次女	長男	長女	次男	次女	兄弟	親戚	その他	
西川	32.0	10.4	5.6	1.6	23.2	3.2	4.8	3.2	3.2	7.2	8.0	125
吾野	24.4	7.3	2.4	3.7	34.1	7.3	2.4	1.2	3.7	7.3	8.5	82
北川	32.8	6.9	1.7	8.6	32.8	5.2	1.7	0.0	3.4	5.2	6.9	58
南川	36.0	6.3	8.1	3.6	28.8	3.6	2.7	3.6	4.5	3.6	4.5	111

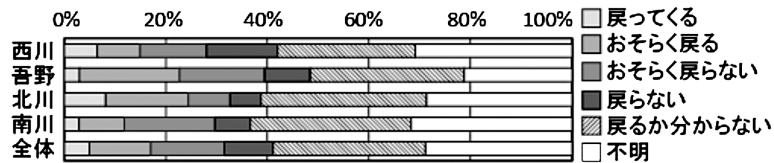


図13 将来家を継ぐ、または継いで欲しい他出子のUターンの可能性

をみると、戻る可能性が低いと考える世帯が約6割を占める（図13）。地元に戻る可能性をやや高く捉えているのは〔吾野〕・〔北川〕である。

このように、今後の後継者、また住まいや土地の将来について不安が大きく、かつ実際に厳しい状況にあることがわかる。

（4）まとめ

吾野地区の家の実態として、高齢の単身・夫婦世帯が約半数を占め、高齢化が進んでいる。一方でこの地域の特徴として、勤務地や他出子の居住地が都市部の交通の便からも比較的行き来しやすいところにあり、実際に他出子と実家との関わりもみられた。特に〔北川〕は他地区と比べて高齢化や単身世帯化が進んでおり、将来の不安が大きい状況にあるが、地元の伝統芸能である獅子舞が家や地域の紐帯となり、家の結束性の強さや、他出子と地域との関わりがみられた。

しかしながら、いずれの地域においても家の継承性については、非常に厳しい状況下にあることは共通する問題である。

Ⅲ．個人としての地域への関わり方

（1）個人の地域社会への参加状況

個人票の回答者の性別・年代は、全体として男女半々で50～70代の回答が中心となる（表3・4、図14）。ただし、〔北川〕では80代も含めて高齢になり、〔南川〕では40代も含めて若齢かつ女性の割合がやや多くなる。吾野地区を出生地とするのは回答者の約半数となるが、吾野地区以外の居住年数

表3 回答者の性別

	%	男性	女性	不明	母数
西川	44.6	53.9	1.5	334	
吾野	46.5	52.6	0.9	213	
北川	43.6	55.1	1.3	156	
南川	53.8	45.4	0.8	238	
全体	47.2	51.6	1.2	941	

表4 回答者の出生地

	%	吾野地区	吾野以外	不明	母数
西川	48.5	49.7	1.8	334	
吾野	50.2	42.7	7.0	213	
北川	48.7	45.5	5.8	156	
南川	43.7	52.5	3.8	238	
全体	47.7	48.1	4.1	941	

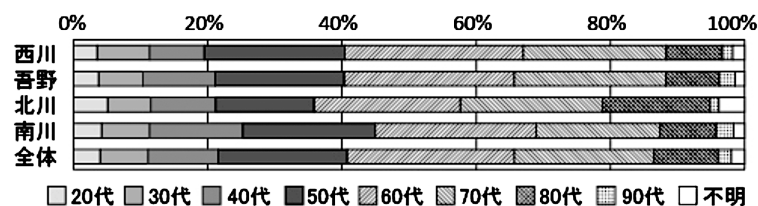


図14 回答者の年代

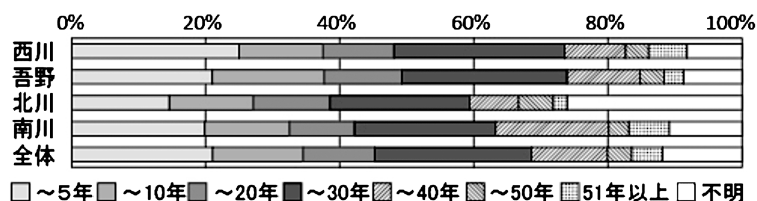


図15 吾野地区以外での居住年数

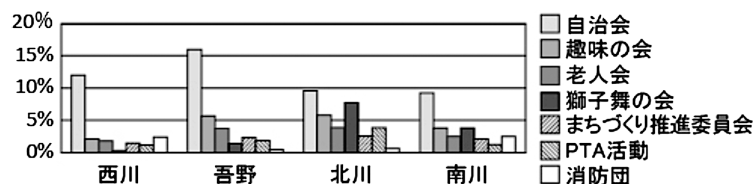


図16 力をいれて活動している参加組織（最大3つまで）

をみると、[北川] では年数が短い人は少ない傾向にある（図15）。

各人の組織参加状況について、重要な役に就いたり、長年継続しているなど、力を入れて活動しているものをみると、全体として値が低いものの[吾野]では自治会の割合がやや多く、また[北川]では地域の伝統芸能である獅子舞の会が挙げられている（図16）。

近所つきあいは、[北川] で関係がより深い傾向にある（図17）。一方、日常の近所の人への手助けは、[南川] で「外出ついでに買物引き受け」や「車での送迎」に加えて、「物の修理や手入れの手伝い」や「物を譲る」、「物を貸す」などのやりとりも他地区に比べてやや多くみられる（図18）。

地域の名人・偉人は、[南川] で「山に詳しい人」、「世話焼き上手な人」を筆頭に多種多様な人が挙げられている（図19）。続いて[北川] が「美味しい野菜作り名人」、「地域の歴史に詳しい」を中心に比較的多く挙げられている。

全体として組織参加に対する積極性はあまり高くないものの、日常の近隣関係としては[北川] において高齢化・単身化を背景とした関係の深さ、また[南川] では関係の広がりが見受けられた。

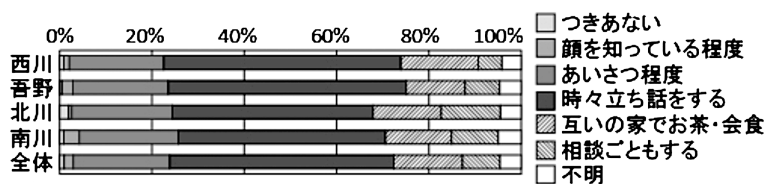


図17 近所つきあいの程度

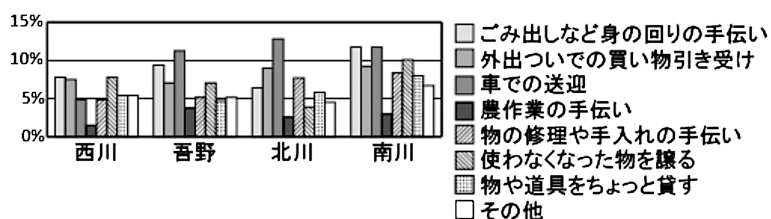


図18 近所の人を手助けする内容

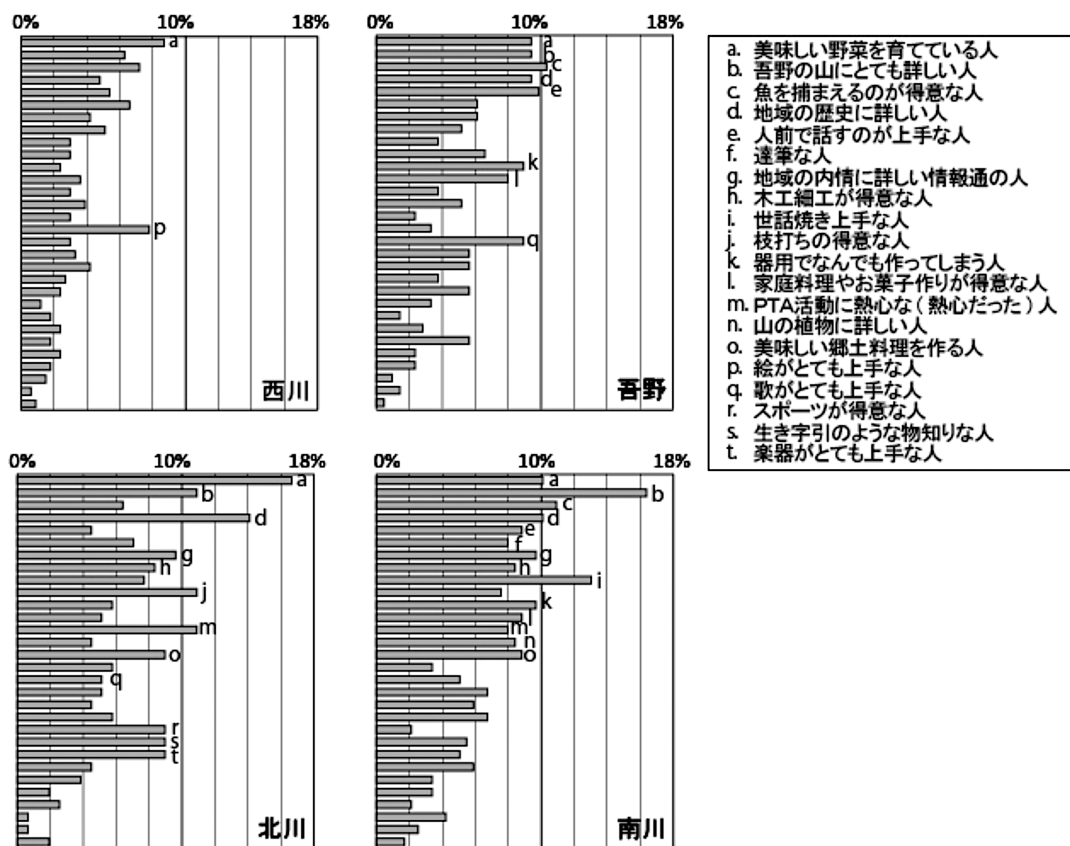


図19 吾野地区にいると思う名人・達人

(2) 個人の地域社会内外に対する認識

個人の自地区に対する認識をみると、「西川」では「都市に近くて良い」という認識が高いものの、「自治会・町内会活動にやりがいを感じる」、「若い世代や女性の意見も地域運営に反映されている」とする人は少ない傾向にある（図20）。一方「吾野」では「自治会活動がしっかりしている」、「女性



図20 吾野地区に対する住民自身の認識

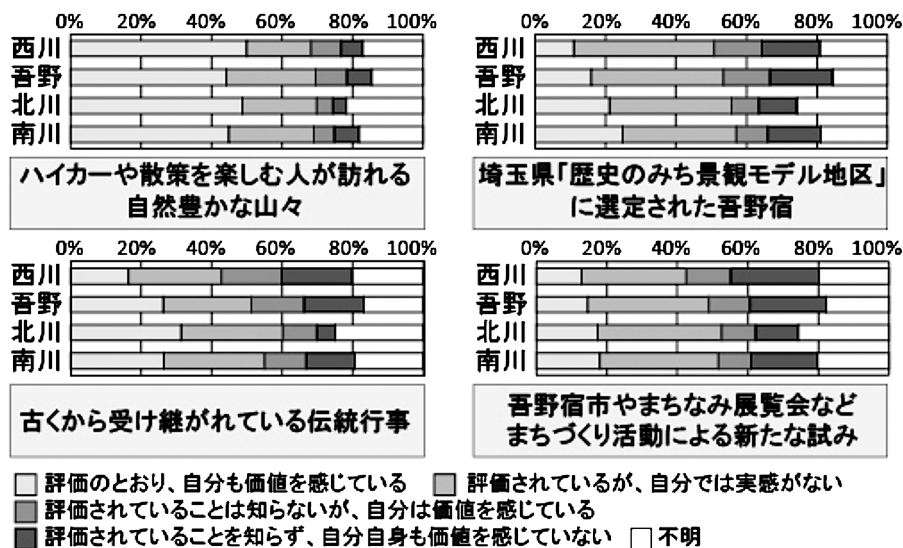


図21 地域外から評価を受けている地域資源に対する住民の認識

も地域の活動でよく活躍している」とする人がやや多い。[北川]では「自然が豊か」、「地域ぐるみの子育て」、「祭り・行事が受け継がれていて良い」という認識が高くみられる。

また地域外から評価を受けている地域資源に対する住民自身の認識をみると、吾野宿に対する評価の高さは、その宿が位置していない[北川]・[南川]で高い傾向にあり、伝統行事については獅子舞で有名な[北川]が住民自身もその価値を感じている傾向にある(図21)。

次に吾野地区への来訪者に対する認識をみると、「来訪者とまちづくりに関する情報交換の場があるとよい」が多く挙げられているのは[北川]・[南川]であり、かつ[北川]では「来訪者に郷土料理を出したり、地域を案内するなどしてみたい」、[南川]では「吾野ファンのような人に、地域運営の場にも参加してほしい」と思う人が多くみられた(図22)。

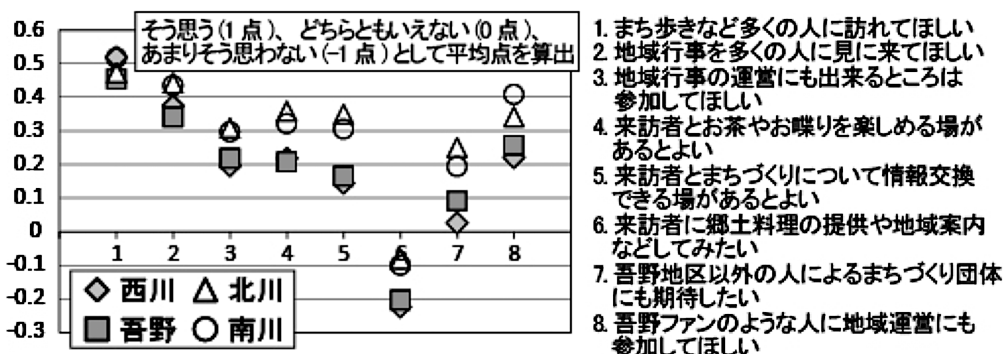


図22 吾野地区への来訪者に対する認識

(3) 今後の地域運営に対する意識

今後の地域運営に対する考え方は、どの地区も「自分がやれる範囲で取り組む」が4割を占めるが、加えて[北川]では「新しいことを取り入れていきたい」とする回答も多くみられる(図23)。

今後吾野地区に住み続けるとする人も、[北川]でやや多いものの全体として6割程度となる(図24)。これは前稿で示した家の継承性の課題として、地域によらず将来を不安視する状況下にある

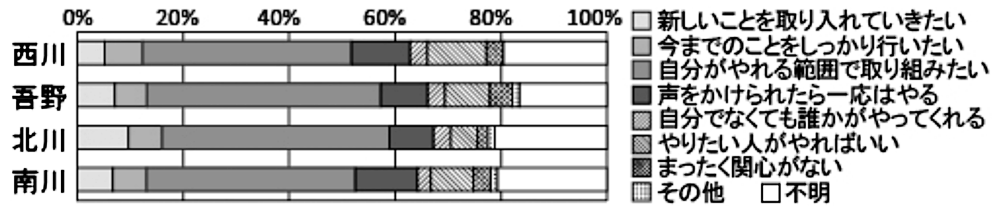


図23 今後の吾野地区の地域運営への参加に対する意向

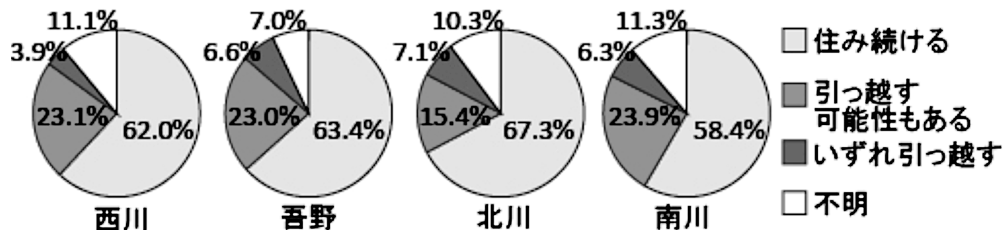


図24 吾野地区における定住意向

特徴と対応した結果といえる。

（4）まとめ

以上、各地区の特徴として、〔西川〕は主要駅や吾野宿が位置し人口規模も他地区と比べて大きいものの自治活動の硬直化が危惧される。それに比して〔吾野〕は比較的主要駅に近く、行政センターが位置する地区であり、自治活動に対しては積極的な姿勢がみられ、女性の活躍もあるとする地区である。〔南川〕は、日常の近隣関係に広がりが見られ、来訪者に対しても情報交換や地域運営への参加をのぞむ開放的な地域社会である特徴がうかがえる。〔北川〕は高齢化・単身化という厳しい状況下にある中で、地域の将来に対して危機意識が高いと考えられる。自治会や伝統芸能である獅子舞に真摯に取り組みながら、新しい風を取り入れることの必要性や、来訪者に対して自ら積極的に関わろうとする姿勢が見受けられた。

ただし、これら地域的な特徴が得られながらも、後継者や地域の存続といった将来の不安は、地域によらないことが前稿のまとめと合わせて明らかになった。このままでは衰退の一途であるからこそ、都市部に近いといった立地条件を生かし、来訪者に対する地域住民の認識を、行動や実践につなげていくことが求められる。また実際に地元まちづくり団体によって、現在様々な試みがなされようとしている。

IV. 組織としての取り組み

（1）自治会の組織体制と課題

前章では吾野地区を4区分した比較分析を行ったが、より詳細にみると、吾野地区は25の集落で構成される。各集落の世帯数は表5のとおりである。なお集落名は仮にA～Yと記す。

表5 吾野地区内の集落ごとの世帯数

A	B	C	D	E	F	G	H	I
71	106	80	42	7	6	40	5	16
J	K	L	M	N	O	P	Q	R
35	32	16	18	56	37	31	14	4
S	T	U	V	W	X	Y		
61	31	22	14	53	18	53		

このように、世帯数が非常に少なくなっている集落が複数みられる。これらの集落は概ね、山間地域の中でも鉄道駅や主要道路から離れたところに位置する。各自治会とも代表者を置いているが、全員男性であり高齢化が進んでいる。日本社会における従来型の組織体制であるが、集落構成員の絶対的な不足から、地域の役をやれる人がいない、一人が複数の役を担わなければならない、結果として集落機能が低下するという状況に陥っているところが少なくない。集落代表者の複数の方から、「地域の危機を感じている」といった意見がヒアリングの中で聞かれたが、そこから新たなビジョンをもって動き出す段階には至っていない。

(2) 吾野宿再生と吾野を語る会

①組織体制

地縁組織である自治会に対し、目的組織である「吾野宿再生と吾野を語る会」は、吾野宿のまちなみの一角にある大河原家の家主・大河原氏を中心となって地域づくり活動を行っている。約7年前に国土交通省「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業として「自然・歴史・生活文化を活かした交流・にぎわい創生プロジェクト」を実施し、その後も継続的な地域づくり活動が行われている。

大河原氏自身は実家を離れて都内に住まいを構え、長年働いてきた。しかし定年後から、週初めは都内、週末は実家がある吾野で過ごすというライフスタイルで、吾野の地域づくりに取り組んでいる。自分は長男であること、また家屋が江戸時代の長屋門を移築したという価値の高い構えであることから、家を継承する役割を担っており、同時に吾野地区の将来についても非常に意識が高く、仕事の経験を活かしながら精力的に会の運営を行っている。

会のメンバーはその趣旨に賛同した約10名で構成されるが、大河原氏と同世代の男性中心である。ただし、メンバーは吾野地区のみならず、周辺の市からも参加している点が特徴的である。組織メンバーが外に開かれているのは、他地域からも吾野地区の魅力が評価されていること、また地元の人間では気付かないことが見えてくるといった利点が挙げられる。さらに平成26年度からは20代後半の地元男性Aがメンバーとなり、組織体制に新たな風が入ってきた。

②活動内容

まず年間行事として次のことが実施されている。

6月	ホタル観賞会	高麗川の川沿いでホタル観賞。音楽家による演奏が行われることもある。市内外から親子連れ等も参加。
7月	じゃがいも街道祭り	地元野菜であるじゃがいもの販売。街道筋を歩く魚オークトレイル等を実施。幅広い世代が参加。
8月	吾野宿祭り・吾野宿市	夏祭り。吾野宿のまちなみエリアには市が立ち、夜には花火も打ち上げられる。
11月	まちなみ展覧会・吾野宿市	吾野宿エリアに西川材を用いた手作り作品が展示販売される。吾野宿市も同時開催。
3月	雛飾り展・吾野宿市	個人宅で保管されている江戸・大正時代に制作された雛飾りが公開展示される。吾野宿市も同時開催。

加えて、不定期ではあるが、大河原家の古民家がギャラリーとなり、和紙の展示が行われることもある。このようなイベントを通じて吾野の魅力を伝えるべく、市内外にチラシ等を配布し来訪者を呼び込んでいる。

また、年間行事に加えて、随時まち歩きツアーも実施している。語る会を窓口として、ツアーガイドの申込みを受け付けている。申込者は、ウォーキングや歴史探訪を趣味とするグループ、建築関連や民俗学関連の専門家グループに加え、旅行会社のツアー企画への組み込みなどもある。数名のグループから100人超の団体まで対応している。また、飯能市のエコツアーに組み込まれたり、埼玉県による「歴史のみち景観モデル地区」の指定を吾野地区が受けたことから、その関連事業としてまち歩きツアーが毎年継続して開催されている。

来訪者は県内が多いものの、首都圏からのツアー参加者なども含まれており、吾野地区の好立地が影響していると考えられる。そして年間を通じて多くの来訪者を招いているのは吾野地区の魅力の大きさが感じられる。

ただし、これらまち歩きツアーは、参加費が保険代程度であったり、会から提供する食事代だけ支払うといった形式がほとんどである。これは会のメンバーの中には、ガイドの仕事を定年後の生きがいとして取り組んでおり、参加費を徴収することに抵抗感を抱いている者もいることが関係している。現段階ではボランティアなツアーガイドであるが、地域経済ベースにいかに乗せていけるか、今後の課題の一つである。



写真3 埼玉県主催まち歩き景観ツアー



写真4 3月の雛飾り展にて個人宅の雛飾りを鑑賞

③拠点整備

前述のとおり、各種行事やまち歩きツアーが開催されているが、それら来訪者が休憩できる場所、買い物ができる場所、トイレを利用できる場所がないという基本的な問題を抱えていた。その中で、唯一大河原氏の自邸である古民家が、来訪者に開放される場所となっていた。古民家は一部を「独楽の館」として改修し、吾野の歴史を知れる掲示物や様々な独楽が展示され、土間の一角には西川材でつくられた椅子・テーブルが複数置かれ、休憩できるコーナーも設けられていた。

この状況に対し、さらに来訪者が気軽に立ち寄れる場所として、平成26年度に語る会として「吾野寄り道プロジェクト」を立ち上げ、地元関係者であるB夫婦と20代男性メンバーAが中心となって、カフェギャラリーへの改修作業が実施された。この改修作業にあたって、会のHPを通じて改修作業への参加を広く募集し、県内外からA氏やB夫婦の友人関係、また古民家や吾野に興味をもった人などが毎週日曜に作業に参加した。これには人間環境デザイン学科の学生たちも何度か参加させてもらい、実際の改修作業から古民家の造りを学んだり、他の参加者との交流を持ったりすることができた。

改修後は、古民家ならではの重厚感はそのまま継承され、その一角が和モダンのインテリアであるカフェギャラリーへと生まれ変わった。地元珈琲店の自家焙煎によるコーヒーが提供される、非常に魅力的な空間に整備された。



写真5 大河原家 カフェギャラリーの整備



写真6 カフェギャラリー吾野 店内の様子

一方、埼玉県景観行政に係ることとして、吾野地区で大きく2つの事業が展開された。一つは先に触れたが平成23年に「歴史のみち景観モデル地区」指定されたことがある。またこれがベースとなり、平成27年3月に大河原邸に加えて、その向かいにある石田邸、また近隣にある高山家の3軒が埼玉県の景観重要建造物に指定され、吾野宿のまちなみを代表する3軒の景観的価値が公式に認められた。

地元住民有志による拠点整備の取組み、そしてそれを後押しする行政の取組み、双方が関連しあって地域の活性化を促進している優良事例といえよう。

（３）まとめ

以上のとおり、大河原氏を中心とした地域づくり活動の継続的かつ精力的な取組みにより、多くの来訪者を招き、また吾野地区の魅力を伝えたと共に、さらに足を止められる拠点整備を行うといった実績が確認できる。中でも、地元住民だけではなく、周辺の市町村や県外からも地域づくり活動に参加している点、また若い世代の参加が見られ始めた点は、組織体制の強化につながると考えられる。

そして実際に拠点整備として古民家改修により魅力的なカフェギャラリーが整えられ、景観行政のもとで「歴史のみち景観モデル地区」や「景観重要建造物」の指摘を受けたことは、地元住民の自分の地域の魅力に対する再認識を促すことが期待される。

特にハード面の整備は視覚的にも、まちなみの変化が認識しやすく、またそこに多くの人が訪れている姿を地元住民が目当たりにはすることは、印象を強くするものである。地域の将来への危機意識のみならず、そういった貴重な資源をもとに地域づくりへと行動を移す原動力になることも期待できる。

Ⅳ. おわりに

（１）まちなみの価値の共有や次世代への継承における課題

本研究期間は２年間であったら、その短い期間の中でも吾野地区は様々な変化や進化がみられた。その動きはとどまることなく、さらに新たな動きが生じつつある。大河原氏を中心とした活動が周囲を巻き込み、うまく歯車が回りだしたところと感じられる。

まちなみの価値の共有や次世代への継承においてまさに好事例であり、今後も期待できる吾野地区において、調査研究から見えてきた課題や要点を次にまとめる。

- ・まちなみの価値は、地元住民には見えにくく、地元から離れるほど価値が認識されやすい。
- ・地域の衰退が深刻化した地域ほど、従来の自治会体制では衰退を克服できる状況にない。
- ・自分の地域のことは自分たちでというのが難しい状況にまで事態は深刻化している。
- ・目的組織としての地域づくり団体は、地域の将来を変えうる重要な存在であり、かつ地元住民だけにこだわらない体制の取り方が可能である。またむしろ外からの意見を取り入れることで新たな視点や取組みが導入されることが期待できる。
- ・地域づくりの担い手自身も、ライフスタイルが多様化しており、市外県外から通う人や、市街地と山間地域の二拠点居住をしている者もあり、貴重な人材である。
- ・多様な主体で構成される目的組織は、従来の組織では取組みにくい地域づくり活動が可能である。
- ・地域づくり団体の組織としての継続性や発展性を鑑みると、地域づくり活動への賛同者を地元内外から集めること、また現在のリーダーの役割を引き継ぐ人材育成が重要である。
- ・まちなみ整備の観点では、地元住民自身による古民家改修は、まちなみの歴史性や重厚感を引き継ぎながらも、来訪者を迎え入れるデザイン性の高い空間に生まれ変わり、かつ来訪者で賑わう新たな景観を生み出し、地域に一つの大きなインパクトを与えた。
- ・行政による景観モデル地区や景観重要建造物の指定は、住民による活動を後押しするものとしてう

まく呼応し、機能している点で評価できる。

- ・これら指定を受けた民家以外にも歴史的価値の高い民家がまだ存在する。これらを現在の景観整備の軌道にいかに乗せていくかが重要である。
- ・一方で、空家問題も生じており、さらなる拠点を増やしていける可能性を有している。

以上となるが、最大の課題は吾野地区内の4地区間での温度差である。吾野宿のまちなみが位置する「西川」においては具体的な地域づくりの動きがみられるが、残り3地区についてはなかなか大きな動きがみられない。「西川」を中心として周辺地区にもまちなみや自然景観の観点から地域づくりの機運を広めていけるか、もしくは各地区において新たな動きの種が見つけられるか、この点については引き続き動向を把握していく。

(2) 愛媛県西予市狩江地区と比較を踏まえた今後の研究展開

本研究は吾野地区を事例としたが、補足調査として愛媛県西予市狩江地区の現地調査も実施した。西日本型の開放的な地域社会と比較することで、吾野地区の特性をより明確にすることを意図した。

調査対象とした狩江地区について、吾野地区と共通するのは、人口減少、少子高齢化、小学校の統廃合、第一次産業の低迷といった農山村地域の共通課題を有していること、また市街地まで車で20-30分程度と比較的近く、基幹産業であるみかんの段々畑が美しい景観であること、地域づくり団体があることなどが挙げられる。

西日本型の開放的な地域社会であれば地域づくりの担い手に多様性があることが期待されるが、実際には狩江地区より吾野地区の方がより多様性を有しているという実感を得た。これは、吾野地区は山間地域ながらも都市的要素を人材の面、人々の価値観の面でより多く持っているという特性があると考えられる。農山村、都市、それぞれの良しあしや固有の価値観をどううまく融合し、活用しうるか。そして地域社会は地域住民だけで担うのではなく、より多様な主体で運営しうる体制づくりについて、引き続き研究を続けていく。



写真7, 8, 9 大河原家にて古民家改修作業に学生たちも参加

引用文献

- 1) 矢部弘海, 菅原麻衣子: 中山間地域における家および地域社会の将来的な継承の実態; 日本建築学会大会梗概集, 2014.9
- 2) 菅原麻衣子, 矢部弘海: 中山間地域における個人の地域社会内外に対する認識と参加の特徴; 日本建築学会大会梗概集, 2014.9

参考文献

- ・飯能市史（通史編／教育／民俗／行政一／行政二）：飯能市史編集委員会

※本研究の初年度（平成25年度）は、当時人間環境デザイン学科助手を務めていた種田元晴氏（現・本学非常勤講師）も研究メンバーとして1年間参画し、本研究成果の一部を担っている。